戦国屈指の知将
小早川隆景
ガイドブック

TAKAKAGE KOBAYAKAWA

【小早川隆景ガイドブック】

発行／三原市経済部観光課　協力／三原市歴史民俗資料館、瀬戸内三原 築城450年事業推進協議会
編集・印刷／(株)ザメディアジョン
監修／本多博之(広島大学大学院文学研究科)

三原の観光について　三原観光navi　http://www.mihara-kankou.com/
問い合わせ　三原市経済部観光課　http://www.city.mihara.hiroshima.jp/
〒723-8601 広島県三原市港町3丁目5番1号　TEL:0848-67-6014　FAX:0848-64-4013
E-mail:kanko@city.mihara.hiroshima.jp

瀬戸内三原
築城450年事業

※パンフレット内で使用されている背景の地図は「国土地理院の電子地形図25000『三原』『垣内』」(測量年・H19)を使用しています。
※記載内容に変更があった場合は、三原市のHPに掲載します。

201711

日本の西は隆景に任せれば全て安泰。

隆景が伊予国を受領する時、豊臣秀吉は隆景をこう評した。〝東の家康、西の隆景〟と謳われたという。

和睦の盟約を賀す酒を飲まぬのは、かえって非礼であろう。

秀吉と和睦した時、毛利氏に酒が届けられ、家臣は毒が入っていると疑ったが、隆景はこう言って酒を飲み干した。

欲をやめて義を守るならば兄弟の不和は起きませぬ。

江戸期の逸話集にあるエピソード。兄弟の結束を訴える病床の元就に隆景はこう訴え、義の大切さを説いたという。

日本では珍しいことだが、伊予には騒動も叛乱もない。

戦国の世を見つめ、心を痛めた宣教師ルイス・フロイスは隆景が統治する伊予国で争いがないことに心から感動し、こう言ったという。

十分に時間をかけて判断するので後悔することが少ない。

秀吉の参謀・黒田官兵衛に対する隆景の言葉。直感で物事を進める官兵衛を讃え、気遣いながらも、その欠点を傷つけることなく指摘した。

小早川隆景（こばやかわ・たかかげ）

毛利元就の3男。12歳で小早川家の養子となる。厳島合戦で功績を上げた。豊臣秀吉からも厚い信頼を得て四国の伊予国を統治するなど、信義あふれる知将として毛利家を支えた。

国重要文化財 絹本著色小早川隆景像（所蔵：米山寺）

※伝記や逸話を元に、小早川隆景やその周辺の人々の言葉とされているものを記載しています。

隆景の生きた時代

天文2年（1533年）～慶長2年（1597年）

▼当時の勢力図

「戦国大名」が出現し領土拡大のため争う世へ

15世紀の後半、応仁元年（1467）から10年間続いた応仁の乱以降、室町幕府は衰退。同時に「戦国時代」が始まり、多くの戦国大名たちが「天下統一」を目指して覇権を争う。

隆景の父・毛利元就は、上杉謙信や武田信玄と活躍時期が重なるが、織田信長は隆景の1歳年下の天文3年、秀吉は天文6年、家康は天文11年の生まれである。

戦国時代から信長・秀吉が活躍した安土桃山時代を経て、徳川の時代へと向かわんとする戦乱の激動期（16世紀）こそが、隆景が生きた時代だった。

筆影山から瀬戸内海を望む

父元就から3兄弟への教え

毛利三矢の訓

毛利元就が防長（周防・長門）を平定した弘治3年（1557）、元就は家督を継がせた長男の隆元、他家に養子に出した二男の吉川元春、そして三男の隆景に「3人で協力し、末代まで毛利家を盛り立てるように」と諭した書状を送る。これがやがて、元就が3子に〝1本の矢を折って見せ、続いて3本束ねて折ろうとするが折れないのを見せて結束を説いた〟という「三矢の訓」の伝説の元となったとされる。

父・毛利元就像（御里茶屋）

毛利家

毛利家のルーツは鎌倉幕府を築いた源頼朝の重臣・大江広元にあり、やがて西の雄・毛利氏となって中国地方全土を治め、現代の発展の礎を築く――。

大江広元の4男、季光が初めて「毛利」を名乗る

源頼朝の側近、大江広元の4男で、鎌倉幕府で評定衆を務めた季光が父から相模国毛利荘を受け継ぎ「毛利」と名乗ったのが毛利氏の最初である。

季光は失脚するが、「毛利」姓は季光の4男・経光が受け継ぎ、新潟の越後国佐橋荘を拠点とした。

経光の4男・時親が安芸国吉田荘に移住。その曾孫元春が吉田盆地を治め、勢力を伸ばすと、大永3年（1523）に毛利元就が家督を継ぎ、中国地方制覇の道を歩み始める。

毛利一族略系図

大江広元 ― 毛利季光 ― 経光 ― 時親 ― 貞親 ― 親衡

- 元春
  - 匡時（坂）
  - 直元（有富）
  - 広房 ― 光房 ― 熙元 ― 豊元 ― 弘元
    - 元房（厚母）
    - 広内（麻原・門田）
    - 忠広（中馬・長屋・平佐）
    - 広世（福原）
    - 元淵（小山・福原）
    - 興元 ― 幸松丸
    - 相合元綱 ― 敷名元範
    - 北就勝
    - 元就
      - 隆元 ― 輝元 ― 秀元（長府藩祖）
        - 秀就
      - 女（宍戸隆家室）
      - 吉川元春
        - 元長
        - 毛利元氏（阿川毛利祖）
        - 広家（岩国藩祖）
          - 広正
            - 毛利就頼（大野毛利祖）
      - 小早川隆景
        - 秀秋（木下家定五男）
        - 秀包（吉敷毛利祖）
      - 穂田元清 ― 秀元
      - 椙森元秋
      - 出羽元倶
      - 天野元政（右田毛利祖）
      - 末次元康（厚狭毛利祖）
      - 小早川秀包

コラム 人物

大江広元【おおえの・ひろもと】

大江広元は源頼朝に仕え、要職の公文所別当となり、頼朝の側近として信頼を得た。鎌倉期の歴史書「吾妻鏡」には守護・地頭は広元が設置した、と記されている。

小早川家

小早川家は本家の「沼田小早川家」、分家の「竹原小早川家」とも発展し、室町期には本家の一部が芸予諸島に進出して水軍の基礎を築く――。

隆景のとき両家統一に

源頼朝に仕えた土肥実平の子、遠平が領地の相模国早河荘（現小田原市）の早川から「小早川」と名乗り、安芸国沼田荘（現三原市）の地頭となる。

4代目茂平が竹原まで勢力を拡大。3男・雅平が「沼田小早川家」を築くと同家の一部は芸予諸島で水軍の基礎を築く。

茂平の4男・政景が竹原荘を分与され「竹原小早川家」となり室町中期には本家と並ぶ勢力へ。竹原小早川家は毛利家から隆景を迎え、隆景が沼田小早川家も継いだことから両家は統一された。

小早川一族略系図

- 実平（土肥）― 遠平
  - 維平
    - 仲平
      - 左衛門尉
    - 維時 ― 実網…
  - 景平
    - 季平
      - 国平（椋梨氏）
      - 信平（小田氏）
        - 定平…
        - 為平（和木氏）
          - 茂国
          - 信平（上山氏）
          - 為範（大草氏）
    - 茂平
      - 経平（船木氏）…
      - 経家
      - （沼田小早川）
      - 雅平 ― 朝平 ― 宣平
        - 尼浄蓮
        - （竹原小早川）
        - 政景 ― 景宗
        - 祐景 ― 重景 ― 重宗 ― 実義 ― 義春 ― 仲義 ― 弘景 ― 盛景
        - 忠茂（赤川氏）
        - 貞平
          - 春平
            - 則平
              - 持平
                - 敬平 ― 扶平 ― 興平
                - 熙平
                - 是景（乃美氏）…
                - 満平（日名内氏）…
              - 時春（梨子羽氏）…
              - 上殿（弐分氏）…
              - 夏平（土倉氏）…
              - 氏平（小泉氏）…
              - 氏実（浦氏）…
              - 惟平（生口氏）…
              - 正平 ― 繁平
              - 弘景 ― 弘平 ― 興景
              - 隆景
                - 秀秋（豊臣秀吉の正室の甥）

コラム 人物

土肥実平【どい・さねひら】

土肥実平は鎌倉期に活躍した豪族中村氏の一族で、現神奈川県の湯河原町や真鶴町辺りの相模地方を拠点としていた。源頼朝の挙兵に中村一族を率いて参戦し、平家追討や奥州平定などで大きな功績を上げたと伝えられている。

隆景の生涯

厳島合戦勝利のカギを握る

隆景は12歳の時、安芸の竹原小早川家の養子となり、当主となる。やがて本家で瀬戸内海の海賊に影響力を持つ沼田小早川家も継ぎ、小早川両家を一本化する。

隆景の力が存分に発揮されたのが、主君であった大内義隆を討った陶晴賢と元就が激突した「厳島合戦」だった。

毛利軍の奇襲に陶軍は動揺、退路を断たれた陶晴賢は逃走して自刃、毛利軍が勝利したが、その際、小早川軍も大いに活躍している。

秀吉から厚い信頼を得る

隆元が若くして亡くなり、その子・輝元が家督を継ぎ、元就が亡くなった。隆景は吉川・小早川の「両川体制」を強固にし、輝元を支える。

やがて織田信長の勢力が中国地方にも及ぶ。総司令官・羽柴秀吉の激しい攻めに隆景は密かに和睦交渉を行うが、本能寺の変で明智光秀が信長を討つと、秀吉は毛利氏と急いで和睦を結び、光秀討伐のため退却していく。

秀吉への疑心が渦巻いていた元春は、「秀吉追撃」を主張するが、隆景は信義の大切さを説き反対した。

その後、秀吉の信頼を得て、四国攻めで功績をあげ、伊予国を与えられる。

この時、隆景は毛利家に与えられた領地を拝領する形にするなど、あくまで毛利家の一武将である立場を崩さなかった。また伊予国統治の間も拠点は三原のままだった。隆景には子が無く、秀吉の義理の甥である羽柴秀俊（後の秀秋）を養子に迎える。

文禄4年（1595）には秀吉から家康、前田利家らとともに「五大老」の1人に任命され、秀秋に家督を譲り、慶長2年（1597）に65歳で三原城内にて亡くなった。

信義と知恵で「毛利家」を存続させた立役者こそ、誰あろう隆景だった。

コラム　人物

陶晴賢
【すえ・はるかた】

防長両国（現山口県）を治めていた大内氏の重臣。主君義隆が文化にのめり込んでいくと、次第に対立するようになった。謀反を起こして大内義隆を討ち、九州の大友義鎮（宗麟）の弟晴英を大内義長として当主に擁立、大内家の実権を握った。

背景写真：夕暮れの新高山城跡

▲歌川貞秀「厳島合戦図」（所蔵：宮島歴史民俗資料館）

隆景の主な年譜

和暦	西暦	年月日	できごと
天文2	1533		毛利元就の3男として隆景生まれる。幼名を徳寿丸。
天文13	1544	11月	隆景、竹原小早川家の家督を継ぐ。
天文14	1545	11・30	元就の正室で隆景の母、妙玖没。
天文15	1546		元就が隠居し、長男・隆元が家督を継ぐ。
天文19	1550	10月	隆景、沼田小早川家を相続し、両家が統合される。
天文21	1552		隆景、新高山城を修築して入城する。
天文24	1555	10・1	厳島合戦。元就が陶晴賢を討ち、隆景が戦功をあげる。
弘治3	1557	11・25	元就、隆元・元春・隆景に三子教訓状を送る。
永禄4	1561	3・26	隆景、元就と隆元を新高山城に招いて歓待する。
永禄4	1561	閏3月	将軍足利義輝が毛利と尼子の講和について隆景に協力を求める。
永禄6	1563	8・4	隆元没。輝元家督を継ぎ、元春と隆景が補佐する。
永禄10	1567	1月	元就末子、元総（後の小早川秀包）が生まれる。
永禄10	1567	2月	「沼田小早川家系図」に三原城を築くとある。
元亀元	1570	8・10	織田信長、隆景に書状。織田との交渉は隆景が窓口となる。
元亀2	1571	6・14	元就没。両川（吉川・小早川）体制がより強固となっていく。

和暦	西暦	年月日	できごと
天正4	1576	7・13	木津川口合戦で毛利水軍が織田水軍を破り、大坂本願寺に兵糧を入れる。
天正6	1578	7・3	毛利方、上月城を攻略。尼子勝久が自害する。
天正6	1578	11・6	第二次木津川口合戦で毛利水軍が織田水軍に大敗する。
天正10	1582	6・4	本能寺の変を受け、羽柴秀吉が毛利方と講和。秀吉は畿内に向かうが、隆景は追撃を控える。
天正11	1583	11月	小早川秀包・吉川広家、人質として秀吉のもとへ行く。
天正13	1585	6・16	秀吉、四国へ出兵。隆景は伊予に上陸する。
天正13	1585	8月	隆景、秀吉から伊予国35万石を拝領する。
天正15	1587	9月	隆景、伊予から筑前への加封領地替え命令を秀吉から受ける。
天正16	1588	2月	隆景、筑前名島（博多の北東）に築城開始。
天正18	1590	3・1	秀吉が小田原城攻めのため京を発ち、隆景、清州城在番を務める。
文禄元	1592	4月	秀吉、第一次朝鮮出兵（文禄の役）。隆景、第6軍大将を務める。
文禄3	1594	11月	隆景、秀吉の甥・秀俊（のちの秀秋）を養子に迎える。
文禄4	1595	8月	隆景、長年の功績により従三位・権中納言、五大老に任じられる。
文禄4	1595		隆景は家督を秀俊に譲り、三原に戻って隠居。秀俊は筑前名島城主となる。
慶長2	1597	6・12	隆景没。享年65。秀俊は秀秋と改名する。

戦国の偉人　隆景と同じ時代に生きた武将たち

織田信長

尾張統一後、勢力を拡大、足利義昭を追放し天下人となるが、家臣に裏切られ自害。

豊臣秀吉

信長に仕え、明智光秀討伐後に勢力争いに勝ち、関白・太政大臣となり天下統一。

徳川家康

秀吉の死後、関ケ原の戦いで勝利し、征夷大将軍となって江戸に幕府を築いた。

黒田官兵衛

秀吉の名参謀で、他大名と交渉役を果たしたキリシタン大名。隆景の良き理解者。

三原城

隆景が築いた城

水軍と防御の拠点として三原に築城を計画

小早川隆景は新高山城に加え、新たに三原に城を築く。

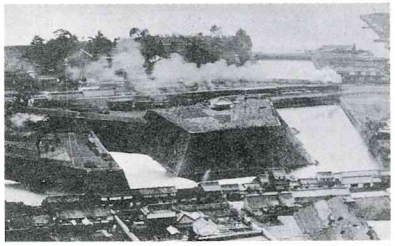
三原は瀬戸内海と山陽道両方を抑える港湾都市で室町期には「三原浦」と呼ばれて栄え、交易も盛んだった。

隆景は水軍の基地、瀬戸内防御の拠点として三原に目を付け、秀吉の動きをにらみながら築城を急がせ、完成後はここを本拠とした。

本丸北側に壮大な天主台日本有数の広さを誇る

城は沼田川河口の三原湾に浮かぶ大島と小島をつないで築かれている。規模は東の和久原川から西の臥竜橋付近までの約900メートル、南北は約700メートルの長さを誇った。

この中に本丸、二之丸、三之丸があり、櫓が32、城門は14もあった。



桜山から見た三原城跡　明治36年。三原城を横切る形で鉄道がしかれた。写真中央には機関車が見える

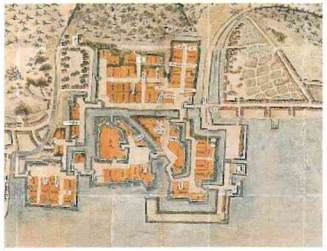
三原市重要文化財　絹本著色登覧画図（一部）（所蔵：妙正寺）

三原城の「縄張」

かつては「浮城」と呼ばれ現在も美しい石垣が残る

満潮時には海に浮かぶように見えたことから「浮城」と呼ばれた。正に海に浮かぶ難攻不落な要塞であった。

石垣の一部は当時、最新技術だった海の底から直接石垣を組み立てる工法で建設された。また石は見た目に美しい、奥より表の「面」の方が広く積み上げられている。この積み上げ方は「余人は真似るべきではない」と言われた特殊工法で、一般的に崩れやすいとも言われるが、四百年経った今もその美しい姿は全く損なわれておらず、その頑強さは当時の建築技術の高さをうかがわせる。



三原市重要文化財　紙本著色備後国三原城下絵図（一部）（所蔵：三原市立中央図書館）

【今も残る城跡】

▶写真右／Ⓙ三原城天主台跡　天主台を取り囲む濠は、幅約30m
▲写真上／Ⓝ三原城刎跡（はねあと）　川の流れを弱め、流れの方向を変える為につくられた石垣　◀写真左上／Ⓛ三原城石垣跡　JR三原駅北口から東30mほど、駅の下にある石垣　写真左下／Ⓗ三原城本丸中門跡 濠には海水を引き入れていた
※J・N・L・Hは次ページ参照

小早川隆景ゆかりの地めぐり

三原駅周辺

三原駅の周辺には三原城の跡地が今も残っている。広大な城の痕跡と石垣の壮大さは、隆景の偉大さを現代に伝えている。

▲Ⓐ法常寺　小早川隆景はここで茶毘（だび）に付され、葬儀が営まれた

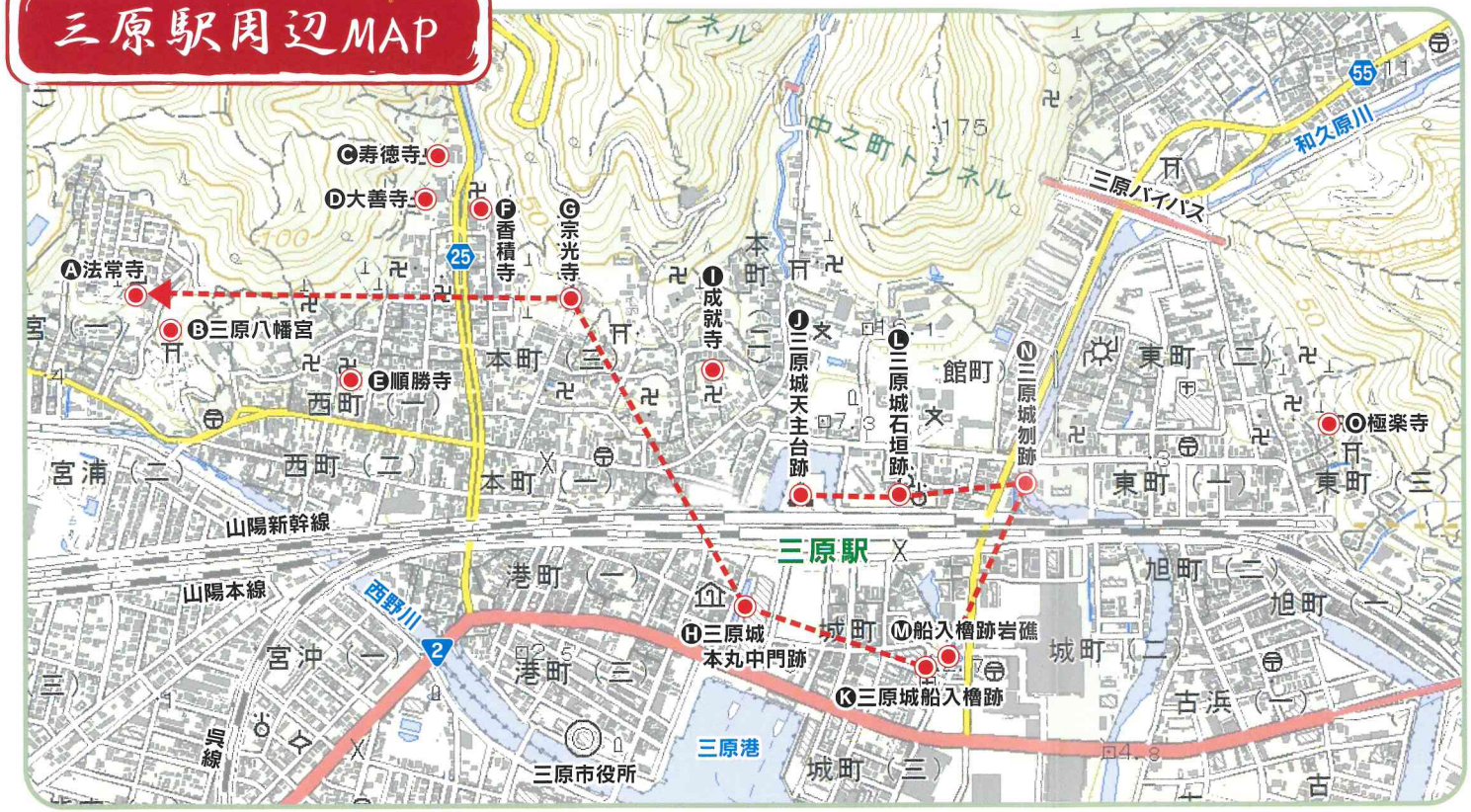
▲Ⓑ三原八幡宮　敷地内からは旧西国街道が眼下に見える

駅そばの優雅な石垣と周辺に残る城跡の数々

JR三原駅のすぐそばには三原城の天主台跡など城跡が残り、濠に浮かぶ優雅な石垣が隆景の偉業を今に伝える。

▲Ⓓ大善寺　沼田の新高山城の麓にあり、隆景室の菩提所だったが、三原城築城に伴い天正8年に移築

三原駅周辺MAP



▲Ⓔ順勝寺　三原城の作事奉行所の門を移築した山門

▲Ⓚ三原城船入櫓跡　城南東の小島に手を加えた海上の櫓

▲Ⓜ船入櫓跡岩礁　船入櫓跡・小島の一部といわれる岩礁

三原駅周辺コース

三原駅から徒歩で約1分 ◀ Ⓙ三原城天主台跡
徒歩で約2分 ◀ Ⓛ三原城石垣跡
徒歩で約3分 ◀ Ⓝ三原城刎跡
徒歩で約5分 ◀ Ⓜ船入櫓跡岩礁
徒歩で約1分 ◀ Ⓚ三原城船入櫓跡
徒歩で約5分 ◀ Ⓗ三原城本丸中門跡
徒歩で約10分 ◀ Ⓖ宗光寺
徒歩で約15分 ◀ Ⓐ法常寺

▲Ⓕ香積寺　三原城築城に伴い高山城北麓から移築された

▲Ⓒ寿徳寺　天正年間にこの地に移築され、家臣によって整備された

▲Ⓞ極楽寺　山門が三原城の町奉行所の門として使われたものを移築している

▲Ⓘ成就寺　本尊は小早川隆景の持念仏であった千手観音を安置

▲Ⓖ宗光寺　三原城下の西側を守る砦を兼ね、新高山城内から移築された

周辺は埋め立てられ都市化しているが、天主台跡は公園として整備され、憩いの場となっている。

南側には船入櫓跡、船入櫓跡岩礁が残り、三原城の広大さを今に伝えている。

また三原駅の近くには三原城築城で移転した寺院など隆景ゆかりの建物も立ち並ぶ。

小早川隆景ゆかりの地めぐり

本郷・沼田

小早川家のルーツともいえる本郷地域。隆景が本拠地とした2つの城跡と、小早川家の菩提所・米山寺があり、隆景が今も眠る。

▲Ⓑ梨羽（なしわ）城跡　小早川一族の梨羽氏が築城した

▲Ⓔ高山城跡　現在、本丸、北の丸、南の丸、犬の丸、扇の丸などの地名が残っている

隆景が本拠地としていた高山城と新高山城

本郷地域には、隆景が三原城を築城するまで本拠地にしていた2つの城跡や小早川家の菩提所・米山寺がある。

本郷は小早川家の本家・沼田小早川家の本拠地。毛利家から竹原小早川家へ養子に入った隆景は、やがて沼田小早川家も相続し、小早川家を統一した。

新高山城に拠点を移転、瀬戸内進出の礎を築く

高山城は小早川茂平の築城とされ、天文20年（1551）10月、沼田小早川家を相続した隆景が入城した。

翌年、隆景は副城だった対岸の新高山城を改修して本拠地を移転。当時は海の水が山麓まで入って船の発着場もあったため、隆景はここを拠点として瀬戸内進出の礎を築いた。

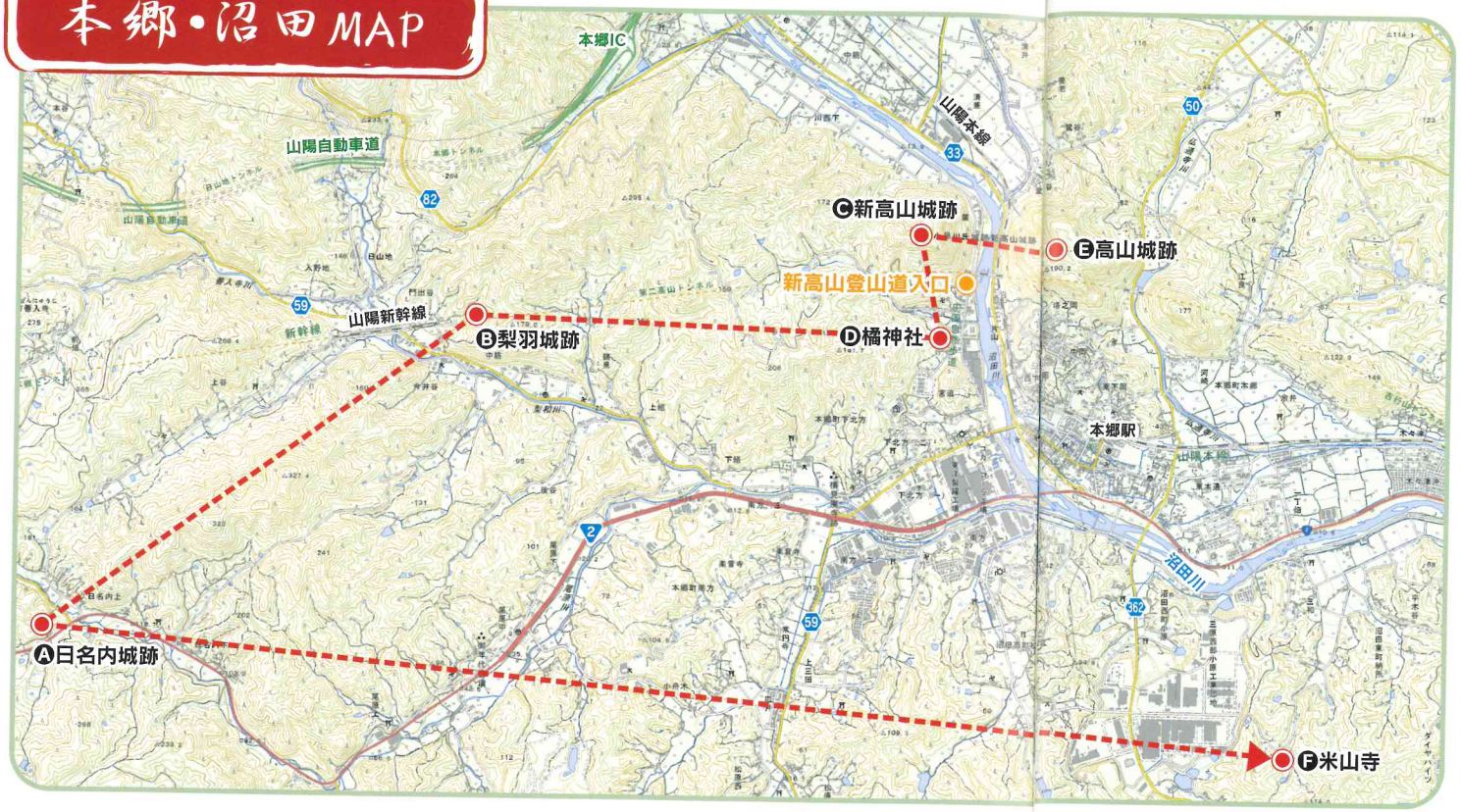
米山寺は小早川家の菩提所で初代実平から17代隆景まで20基の墓が並び、絹本著色小早川隆景像があり、国の重要文化財になっている。

◀Ⓐ日名内（ひなない）城跡　小早川家の家臣であった日名内家によって築城された

▼小早川家の墓が並ぶ。一番右が隆景の墓

◀Ⓕ米山寺　小早川家の菩提所で初代実平から17代隆景までの宝篋印塔（ほうきょういんとう）20基の墓が並ぶ

本郷・沼田MAP



◀Ⓓ橘神社
永禄13年（1570）に隆景によって屋根のかやぶき工事が行われている

▼新高山城跡の登山道入口

▲Ⓒ新高山城跡　山上でも普段の生活ができるように居館が山の上に造られた

本郷・沼田コース

- 本郷ICから車で約10分
- Ⓔ高山城跡
- 車で約9分、徒歩で約13分、計22分
- Ⓒ新高山城跡
- 徒歩4分、車で10分、計14分
- Ⓓ橘神社
- 車で約9分
- Ⓑ梨羽城跡
- 車で約14分
- Ⓐ日名内城跡
- 車で約19分
- Ⓕ米山寺

小早川隆景ゆかりの地めぐり

久井・大和周辺

小早川家の勢力拡大に尽くした椋梨氏の居城跡など、風光明媚な史跡が今に残る。

▲Ⓔ羽倉（はぐら）城跡近くにある城主殿様墓　小早川家家臣の末近氏が築いた。現在、城跡は区画整理で田んぼになっている

▲Ⓖ久井稲生神社　元就によって建てられ、隆景が紙本墨書大般若教六百巻を奉納した

小早川家・毛利家発展を支えた椋梨氏

椋梨城跡（堀城跡）は毛利家・小早川家の勢力拡大に貢献した椋梨氏の居城跡。

小早川家3代・景平の2男・季平が椋梨川流域に広がる沼田新荘を譲られて、椋梨氏を名乗った。季平の子・国平の代から城に定着したが、関ケ原の戦いの後、毛利氏とともに防長に去ったため、城としての役目を終えた。

元就・隆景にゆかりの風光明媚な「瀑雪の滝」

瀑雪の滝は沼田川沿いの県道からほど近い場所にあり、幅約3メートル、高さ30メートル。水煙が立ち込める景観は見事で、隆景を訪ねた毛利元就は吉田に帰る途中、この滝を見物した。

また広島空港に近い女王滝は3段の見事な滝で、1997年の大河ドラマ『毛利元就』のオープニング映像に使用された。

▲Ⓐ椋梨城跡　小早川一族の椋梨氏が築城し、毛利家が防長に移封されるまでこの地の中心であった

▲Ⓑ棲真寺　鎌倉時代から続く名刹棲真寺。元就が隆景を訪ねた後に、宴を催したといわれる

▲Ⓕ佛通寺　小早川春平が大通禅師を迎えて建てた寺。右奥が本堂

久井・大和周辺MAP

◀Ⓓ瀑雪の滝　滝の上を登ったところに棲真寺があり、「棲真寺の滝」とも呼ばれる

◀Ⓒ女王滝　岩盤を流れ落ちるさまが女王の白袴のように美しく見えることが名前の由来。高さ25m

久井・大和周辺コース

三原久井ICから車で約15分

Ⓕ佛通寺

◀車で約28分

Ⓒ女王滝

◀車で約17分

Ⓓ瀑雪の滝

◀車で約33分

Ⓑ棲真寺

◀車で約27分

Ⓐ椋梨城跡

◀車で約20分

Ⓔ羽倉城跡

◀車で約13分

Ⓖ久井稲生神社

安芸高田市をゆく

毛利元就・隆元の足跡を訪ねて

隆景の父・元就は、わずか一代で中国地方を平定し、安芸国の国人領主であった毛利氏を、西日本最大の戦国大名に、のし上げた。

毛利氏の居城「郡山城」は、東西に1・1キロ、南北に0・9キロと戦国期最大級を誇る山城である。元就は75歳の生涯を閉じるまで、ここを本拠として過ごした。元就の嫡子、隆元は、天文15年（1546）頃に家督を譲り受け、とくに内政に手腕を振い父や弟を支えた。多治比猿掛城で生まれたといわれ、佐々部（安芸高田市）で亡くなった。その故郷、安芸高田市には多くの史跡が残っている。

郡山城跡の麓には、元就をはじめとする毛利一族の墓や百万一心の碑などがあり、日本百名城にも指定されるなど、観光スポットとなっている。

▲郡山城と町並み

▲毛利氏の戦勝祈願所であった清（すが）神社

▲隆景の館があったといわれる藤杜（ふじもり）神社

毛利元就像（御里茶屋）

安芸高田市歴史民俗博物館

毛利氏関連の古文書や郡山城跡からの出土遺物など貴重なものを多く所蔵。常設展のほか企画展や公開講座もある。

●住所／広島県安芸高田市吉田町吉田278-1
☎0826-42-0070　●営業時間／9:00～17:00
●休／月曜（祝休日の場合は開館）、祝休日の翌日（土日の場合は開館）　●料金／大人300円、小・中学生150円

▲毛利一族の墓所

▲毛利元就の墓

◀元就の長男、隆元の墓

北広島町をゆく

吉川元春の足跡を訪ねて

吉川元春像（枝宮八幡神社境内）

北広島町には隆景とともに両川体制で毛利を支えた兄・吉川元春の史跡が今に残る。

吉川家を相続した元春は、天文19年（1550）に、日山へ入城。標高705メートルの山頂付近に28の郭を持つ大規模な山城である。日山城跡は、山頂本丸まで東側から登ると約50分。

また、志路原川の河岸段丘上に元春が隠居所として建設した館跡がある。間口110メートル、奥行き80メートルの規模。吉川氏が岩国に移ってからは廃墟となったが、現在、「吉川氏城館跡」として歴史公園に整備されている。公園内には復元された中世の台所や庭園があり、奥には元春・元長の墓所がある。

これらの吉川家ゆかりの史跡の中核施設として戦国の庭歴史館も整備されており、テーマ別の展示コーナーや情報映像室、体験コーナーを備える。

▲小倉山城跡登山口。15世紀から16世紀前半にかけて吉川氏が本拠とした城跡

◀枝宮八幡神社。天正3年（1575）に元春、元長父子によって本殿が再建された

▲奥に見える山が日山城跡

戦国の庭歴史館（吉川元春館跡史料館）

小倉山城跡や万徳院跡、吉川元春館跡の発掘調査成果や整備内容、出土品等が展示されている。館跡歴史公園に隣接。

●住所／広島県山県郡北広島町海応寺255-1
☎0826-83-1785
●営業時間／9:00～16:30（入館16:00まで）　●休／月曜
●料金／大人300円、高校生100円、中学生以下無料

▲吉川元春・元長墓所

▲吉川元春館跡正面石垣跡。高さ3メートルの巨大な石垣が80メートル続く

▶元春の菩提寺「海応寺跡」

小早川隆景伝

隆景の生きかた

「これからは、兄弟3人が団結し、毛利家を支えていくように――」

出雲の尼子氏が台頭する危機的な状況下で、何としても中国地方の覇権を握りたい毛利元就は、そう3人の息子たちに説いた。

隆景は、瀬戸内の水軍の信頼が厚かった小早川家を統一して以来、大きな勢力だった村上水軍の信頼も得ることができた。そのため、防長の雄・陶晴賢と雌雄を決した厳島合戦では、海からの攻めを担い、勝利に大きく貢献する。次男・吉川元春も、陸戦において大きく貢献し、隆景の窮地を救っている。厳島合戦はまさに「両川体制」が大きく機能した結果の勝利だった。

だが、長男・隆元にとって、弟2人の大活躍は複雑なものがあった。元春もまた、毛利家発展に尽くしながら、瀬戸内で大活躍する末弟の存在は、決して面白いものではなかった。「自分が家督を継いでいたら…」そんな想いが隆景の頭をよぎってもおかしくはない。だからこそ元就は、三子教訓状を3人に与えた。カリスマ性を持つ元就が健在だったこともあり、兄弟の確執が表面化することはなかった。

だが、事態は大きく変わっていく。長男・隆元が急死し、わずか11歳の輝元が家督を継いだ。健気な輝元の瞳に、毛利家の行く末を憂う父・元就の深い想いを悟った隆景は、子供がいなかったこともあって、若君の成長を心から期待し、私欲を捨て、小早川家を捨ててでも毛利家発展に尽くし抜くことを心に誓う。

元就の死後も、この隆景の深い決意は、微塵も揺れることは無かった。隆景の力量からすれば、クーデターを起こすことも、時が来れば天下を取ることも可能であったかもしれない。「可能だった」という歴史家もいる。

しかし、隆景の頭には「天下を取る」気など、さらさら無かった。彼の頭にあったのは、輝元、すなわち毛利家を支えていくこと。つまりは、輝元にとって「いい叔父さん」であることにあった。そのために、あまたの野心家たちが群雄割拠する戦国時代にあって、毛利家を守ることに、その人格と知略をフル稼働させていった。

日々増していく絶大な織田信長の権力を背景にし、中・四国地方を攻めてきた羽柴秀吉が、本能寺の変で引き返したとき、隆景は秀吉との講和の約束を守り、秀吉を追わなかった。「あの時、秀吉を討っていれば、世は毛利の天下になっていたのに。隆景は判断を誤った――」後年、隆景にこんなことを言う毛利家の家臣も多かった。しかし、隆景はこう反論した。「あのとき秀吉との約束を守ったから、今の毛利家の安泰があるのだ」

これは事実である。秀吉は隆景を信頼した。疑心暗鬼が渦巻く戦国時代、秀吉は、人を見抜く力は天下一品だった。隆景は秀吉の信頼を得ながら、それでもその巨大な勢力に飲み込まれることなく、中国地方における毛利家のアイデンティティーをしっかりと守り、それでいてあくまで影の存在として、輝元を立てていくのである。

やがて隆景は、秀吉から伊予を任され、筑前や筑後・肥前の一部の支配も任される。秀吉から伊予領を与えられた時も、隆景は「秀吉から輝元に与えられ、さらに輝元から与えられる」という形にこだわった。

その優れた隆景の人格は、「伊予には騒動も争いも全くない。争いの絶えない日本で、これは奇跡だ。こんな人物は他にいない」との当時のキリスト教宣教師の賛辞に現れている。

生涯、元就の教えを胸に秘めながら、三原を拠点に海を制し、中国地方から西の日本を争いから救い、大活躍した隆景――。

隆景が亡くなった時、輝元は嘆き悲しんだ。その3年後、関ヶ原の戦いが起こり、輝元は難しい判断を迫られるが、隆景はもうこの世にはいない。生涯「いい叔父さん」であろうとした隆景。彼が生きていたら、この難局をどう判断し、どう乗り切っただろうか？ そして歴史はどう変わっただろうか？ それは当時の輝元の想いでもあり、現代にあって隆景を偲び、慕う我々の想いでもある。

（小早川隆景ガイドブック編集部）

軍記物語から小説やドラマにも登場する隆景

知将であり、情にも厚かった小早川隆景。その生き様は時代を超え、たびたび様々な物語に登場して人気を得てきた。

隆景が登場する物語は、古くは岩国領の家老・香川正矩が江戸期に書いた室町時代から戦国時代にかけての軍記物語『陰徳太平記』である。

近年の小説で代表的なのは『上杉鷹山』などで知られる人気時代作家・童門冬二の『小早川隆景』（実業之日本社刊・学陽書房から文庫版が刊行）だろう。この本では父・元就から疎まれながら毛利家に尽くしていく隆景の心情から始まり、やがて秀吉から信頼され、名将と成長する隆景を生き生きと描いている。

またテレビドラマでは平成9年（1997）の大河ドラマ『毛利元就』で恵俊彰さん、平成26年（2014）の大河ドラマ『軍師官兵衛』では鶴見辰吾さんが演じ、黒田官兵衛の終生の友としての隆景を好演した。

背景写真：小早川隆景像（三原駅西側・隆景広場）

三原市へのアクセス

広島市街から

JR
◎広島駅から山陽新幹線こだまで約25分、
◎または、山陽本線で約60分、呉線で約120分

車
◎広島ICから山陽自動車道で本郷ICまで約40分、本郷ICから約25分
◎または、山陽自動車道で三原久井ICまで約50分、三原久井ICから約20分

福山市街から

JR
◎福山駅から山陽新幹線こだまで約15分
◎または山陽本線で約30分

車
◎福山東ICから山陽自動車道で三原久井ICまで約30分、三原久井ICから約20分
※福山西ICから国道2号で約30分

参考文献

- 『三原市史』（三原市）
- 『小早川隆景のすべて』（新人物往来社）
- 『安芸毛利一族』（河合正治・吉川弘文館）
- 『小早川隆景』（童門冬二・学陽書房）
- 『史跡毛利元就－ふるさとの事績－』（福間健・中国新聞社）
- 合併10周年記念「三原市の文化財」 ほか

コラム 元就・隆景ゆかりの人物

曲直瀬 道三【まなせ・どうさん】

永正4年（1507）～文禄3年（1594）、日本医学界中興の祖として、医聖とも称された官医。織田信長から派遣されて毛利元就も診察している。大陸から伝わった医学をもとに、腰痛や腹痛、下血など病気を74の部門に分け治療法を解説した日本初の医書『啓迪集』がある。三原市立中央図書館にも所蔵。